特集 2

大学院

《総合科学研究科レポート》

どんな進路へ進むの？

文系・理系の割合は？

どんな授業をしているの？

入学試験の内容は？

大学院総合科学研究科。身近なようで、詳しく知らない学生も多いのではないでしょうか。今回は、大学院についてもっと知るために、総合科学研究科の吉田先生と院生の方にインタビューさせていただきました。

事前に少し調べてみると、専門用語で授業内容は意味が分からず。それまで院に対しては漠然と「難しい研究をするところ」というイメージしか無かったのですが、いざインタビューをしてみると、院についての興味深い話をたくさん聞かせていただくことができました。

Master's course

大学院って、どんなところ？

Graduate School

Integrated Arts and Sciences

Doctor's course

インタビュー：吉田光演先生（総合科学科研究科副研究科長（言語文化プログラム））

吉丸さん（総合科学研究科前期課程〔M〕（総合科学部卒業））

阿拉塔（アラタ）さん（総合科学研究科後期課程〔D〕（教育学部卒業　中国出身））

※敬称略

～出身～

――院生の方はどこから来ていますか？

吉田「全国の大学から来ていますが、広大生の割合は博士前期課程で約38％、博士後期課程で42％です。→表①。ちなみにM（前期課程）が定員60人、D（後期課程）が20人です。もちろんこれは広島大学全体なので総合科学以外の学部の人もいますが、総合科学部の学生さんがかなりいると考えていただいていいです。

中国の学生がかなり多いですが、ほかにも韓国、バングラデシュ、ギリシャ、アメリカ出身の方など留学生が結構多いのが特徴的です。」

～文・理の比率～

――文系、理系の比率は？

吉田「Mの方では文系は6割、理系が4割です。Dの方はあまり変わらず、大体半々です。若干文系の方が多いでしょうか。教員の数も文系の方が少し多いです。」

～プログラムについて～

――文系、理系の違いというのはプログラムが環境、人間、文明とあるので、環境が理系で、他の2つが文系ということで人数に違いがあるということでしょうか？

吉田「そんなことはありません。大学院は「人間科学部門」、「文明科学部門」、「環境科学部門」という3つの部門からなっています。それぞれの部門の中に理系と文系が混ざっているという形になっていて、「文明科学部門」だけは文系中心になっていますが……だからそれぞれの部門の中に文系的な要素、理系的な要素が入っているんです。ちなみに、吉丸君はこういう部門とはちがって、21世紀科学プロジェクト研究という、部門を横断するプロジェクト研究の方に属しています。大学院はやっぱり、学部と違って研究中心、というか、先生と一緒のテーマを求めていくというか、自分のテーマを研究するというのが一つの方向性になります。」

――研究するときの専攻は学部と比べると狭いということですが、3つの部門の中に理系と文系が混ざっているのは関係するのですか？

吉田「関係すると思っています。これには2つあって、大学院で授業を取っていくカリキュラムの部分と、研究の

	人数（M）	割合（M）	人数（D）	割合（D）
文系	76	59.8%	61	51.7%
理系	51	40.2%	57	48.3%
計	127		118	

表①

広島大学出身者	博士前期課程Master		博士後期課程Doctor	
18　年　度	63名中24名	38.1%	39名中13名	33.3%
19　年　度	63名中23名	36.5%	30名中15名	50.0%
20　年　度	47名中19名	40.4%	40名中20名	50.0%
21　年　度	60名中22名	36.7%	29名中10名	34.5%
計	233名中88名	37.8%	138名中58名	42.0%

☆プログラム

総合科学研究院は、3つ＋αの部門に分かれている。それぞれ「人間科学部門」「環境科学部門」「文明科学部門」である。

さらに、すべての部門を横断でき、自分の興味に沿って研究するのが21世紀科学プロジェクトである。

部分があります。大学院の学生が授業を取る際には、特にMの課程がそうなんですけど、教育的な側面がある部分がかなりあって、全体の土台に当たるコア科目というのがあります。コア科目は共通科目になっています。Mで入ってくる学生は全員、4つの講義、「現代リスク論」、「総合情報論」、「文明と環境」、「創造と想像」から2つを必ず受講します。4つの講義には、それぞれ文系と理系の先生が必ず加わって授業を展開します。それから、この共通科目を取るだけでなく、たとえば人間科学部門の言語研究領域に属している人はその領域から8単位とって、それ以外の領域からもう2単位取って、別の部門からも取ってくるという形で、自分の分野だけで完結するという風になっていないんですよ。それで、自分の専門性を見つめながら、同時に違った観点というのを取り入れてもらうという風にしています。21世紀科学部門というのは部門の3つの壁も取り払って、その壁を越えた形で横断的に取ってもらうということになります。

吉田光演先生

☆コア科目
総合科学のエッセンスを学ぶために開設された共通科目。21世紀の具体的な問題について理系、文系の枠を超えて取り組むプロジェクト型の科目。

狭い専門だけをやっていれば何か見えてくるかというとそうじゃなくて、そこで違った見方というものが必要になってくるんですが、これをどうやって教育と研究とに取り入れていくかがなかなか難しいですね（笑）。

〜進路〜

――文系の方はどのような進路に行かれていますか。理系の方は院を出ても、メーカーに行ったりし易いということがあると思うんですが。

吉田「院自体が平成18年からなのであまりデータは無いんですが、進学する人は博士の後期（D）に上がって、もっと研究を突き詰めていこうとする人がかなり何人もいます。公務員は学部時代に公務員試験に受かればいいですが、受からなかった場合にMの2年間でチャレンジしようという人も結構います。Dまで行くとかなり専門性が強くなるので、就職はできるとは思いますが、職種の幅は狭まるかもしれません。ただ、就職のレベルでは2年間のMの間は基本的に学部とあまり変わらない、むしろ専門的知識をつけたりして、そんなに壁は無いと思います。教員とか、地方公務員とか目指している方は大学院でも全然ハンディはない。だから文系の方でも大学院のMくらいは出てるということはそんなに就職の上で問題になることはないと思います。理系の方はかなり大学院に進む学生が多くて大学院を出てる方が有利だったりするわけですよね。ただし、Dを出ると、研究者になりたいけどなかなか無いということもあります。特に分野によって結構需要がある所と、無い所があったりするので、同じ文系でも十把ひとからげには言えないんです。これはあくまでも、5年間ずっと行った場合で、だからMの2年はそれほど不安に思うことはありません。また、理系の方は、製造業や研究機関など希望したところに進んでるんじゃないかなと思われます。文系の場合は、どこの大学院へ行っても、やはり、自分の専門が活かせる仕事がストレートに見つかるということは、教員を除けばなかなか無いと思ったほうがいいかもしれません。

ただ、大学院の話じゃないのですが、この前ホームカミングデーで、NHKの広島の方、それから中国新聞の方が来られてましたけど、マスコミのジャーナリズム関連というのは、総合科学的な視野を持った人材が非常に求められているそうです。だから、総科から、NHKとか中国新聞に入る方はかなりいるらしいです。」

☆前期課程
2年間。修士。Master（M）

☆後期課程
3年間。博士。Doctor（D）

〜授業について〜

――先生の学部と院での授業の取り組み方に違いはありますか。

吉田「特に大学院の授業の取り方で、専門の研究領域の授業でも、専門以外の学生の人が取らないといけないということもありますので、大学院の授業はかなり学際的な方向で、専門分野に特化されてない学生にも分かるように、しゃべることを心がけています。授業では違う分野の方が多勢来るので、そういう人に分かるような講義にしています。授業科目それぞれが大抵、2人の教員とかで組んで、チームワークを意識しています。このチームワークの一番最先端がさっき言ったコア科目で、これなどは、文系、理系すべての院生の方をミックスして、グループ討論を行って、学問の総合性とか、21

授業の風景（認知情報処理論）

世紀の問題を解決するために何が必要かということで自分の専門を生かしながら、考えてもらおう、ディスカッションしてもらおうっていうのを中心にしています。本当にこの授業は皆さんにもお勧めしたいぐらいの総合科学のエッセンスっていう感じで力を入れてやっているつもりなんです（笑）。もう一つは、では専門性の方はどうするかということですが、専門性の部分は、ゼミ、演習のような形で行います。Mの段階では、総合科学演習というのがあって、これは本当に1対1で研究室単位でものすごくハードに厳しくやります。この授業は学部時代と全然違っていて、それぞれの研究室のテーマに沿って、例えば、修士論文を書く、博士論文を書くということを最終的なゴールにします。それまでに、さらに学会で発表したり、論文を書いたりとかっていうのをやるんですよ。雑誌、学会誌、専門誌に載せる。それをひとつの目標として少しずつステップアップしていくという形になっているので、そこの鍛え方っていうのは学部とは全然違います。

研究室の中で厳しくやった方が、学会発表でもいい結果が出せますね。中で厳しくやって、もう叩かれて、何くそってまた勉強して、そうしてやってくと、学会とかに出ても大丈夫。

そういうことで、大学院というのは、先生と院生の1つの研究っていうレベルでは同じなので、この研究をするっていう目線ですね、それが学部と違ってるんじゃないか、と僕は思ってるんです。もちろん先生と院生が一緒に研究するということだと時には差が大きいので、そこに至るまでは、もうビシビシ指導されるかもしれませんけど（笑）。どうですか。」

吉丸「僕の場合は比較的先生が自由にさせて下さるので、結構自分のやりたいようにやってます。でもその代わり、発表とかはきついですよね。学会では専門の、音声学を専門とされる方々の前で発表しないといけなかったりするので、総合演習以外でも、先生のところに伺って、ここを直した方がいいという指導をよくもらいます。」

――やっぱり学部よりも厳しいですか。

吉丸「そうですね、やっぱり学部よりも厳しい。学部の時だったら、卒業論文は、ある程度妥協も許されたんですけれども、院に入ってからは妥協っていうものが許されない。まあでも、かなり妥協してるんですけど（笑）。」

吉田「Dの方は、もうひとつ上のランクの研究演習があります。そこでは、もうほとんど、先生と1対1になってくるのかな、論文指導とか。」

阿拉塔（アラタ）「そうですね、博士課程はMとはまた違って、Mの時は先生からこの内容で発表しなさいとか、ちゃんとこういう指示があったんですけども、今はもう自分ですべてをやらなければいけないので、発表の材料とかが見つかったら発表を自分で決めて自分で進めていきます。研究の段取りも自分で決めていかなければならず、頼る人は自分しかいないので、自分でやってそのあとで先生に見てもらって、それから作っていくっていう形です。」

――21世紀プロジェクトはカリキュラムの中に入っているんですか。

吉田「一部分入っています。先ほど述べたコア科目というのは、4つの講義の中の2つを選択して、4単位を取らないといけません。それで、このコア科目の運営には、RM（リサーチマネージャー）プログラムが全面的にかかわっています。それで、コア科目をはじめた時には先生が4人担当し、1人につき3回ずつの講義を総合科目のように、オムニバス的な感じでやってたんですね。それで、そのときは、特に学部から上がってきた学生さんかもしれませんが、「ただ先生がしゃべってるだけじゃないですか」っていう批判がありました。「どこが総合科学的で、どこが新しいんですか」っていう厳しい意見もあったんです。では、どうしようかっていうことで話し合い、やっぱり総合科学研究科という新しい大学院なのだから、新しいテーマをみんなで追い求めないといけない。だから、文系の学生も理系の学生も先生もみんなで一緒になって議論しよう、グループ討論は5～6人で行おう、違った方向で作り上げていこうっていうことになり、このプログラムが始まりました。

阿拉塔さんには、TA（ティーチング・アシスタント）っていうのを2回ぐらいやってもらってます。」

吉丸さん（左）と阿拉塔さん（右）

阿拉塔「去年は「文明と環境」で宮島をテーマにグループワークをしました。」

吉田「宮島の観光をどのように浸透させるかというテーマで、たとえば人間行動の院生の方、言語研究、それから環境の方とか、全然違った分野から話をすすめていく。最後は合宿をしてパワーポイントを使って発表をするというように、これでマネージメントやプロジェクトのホストなどを行う。それから私はこう思う、私のやってる研究はこうなんだっていうことを、同じ分野の人だと言えるんですけど、違う分野の人に、そんなこと全然知らないよっていう人に教える。そういうことは大変だよね。

専門家から非専門家へと伝える……そういう能力を開発しよう。ディスカッションをきちんとやっていこう、という目標を立ててやっています。それから、TAの方は、ファシリテートっていうんですけど、議論を促す、気づきを促す、或いはこういう風にしたらいいんじゃないかっていう、そういうアドバイスを行う能力を鍛える。」

阿拉塔「そうですね、一方的なアドバイスじゃなくて、会話、ディスカッションを促して、みんなで話し合うような雰囲気をつくることをやっています。」

吉田「みんなで、ある問題を解決するためにどうしていったらいいのかっていう課題を、プロジェクト的に、みんなの知恵を集めていくっていう、それをリードしていく、創り出していくっていうのは一つの能力であり、それが総合科学部の人材養成の目標で、そういうものを本当に大学院で具体的にやっていこうじゃないか、そのことによって、人はどんな専門を持っててもいい、でも、会社なりに入った時に、そういう問題解決能力は絶対に役に立つ。それをプログラムの目的にしているわけです。

もう一つは、21世紀プログラムをもっと展開していくために、いろんな地域に調査に出掛けたり、研修したりとか、いろんなプロジェクトに貢献したり、そういうことに予算を使うようにしています。それから、阿拉塔さんも参加している学生独自プロジェクト。こういう研究テーマを持ってる、こういうとこに調査に行きたい、研究のためにこういうものが欲しい、そういうプロジェクトに対して支援するっていう形で、それぞれの院生たちの研究、特に研究で独自の融合的なものに対してサポートするということをプログラムで行っています。これらの活動を3つ合わせたっていうのがRMプログラムのだいたいのイメージです。

だから、大学院では二本柱みたいなことで考えてくれたらいいと思うんです。自分のやりたいことが見つかった、そしたらもっとやりたいなぁと、それを、演習などの形で伸ばす。と同時に、そのテーマを突っ込んで深く研究したいという、そういう人がたくさん集まって、自分のことしか考えないだけのグループじゃなくて、ある問題についてみんなで考える、そういう共同的な能力があったらいいんじゃないか、こうした能力がこれから必要とされていると思うんです。」

〜試験〜

――正直、広大総科生は入りやすいのですか。

吉田「総科生のほうが先生の専門などをよく知っています。やはり、指導教員から教えてもらうことが一番大事ですね。研究テーマで近い先生について、その時にこの先生がこういうことやってるんだということ。大学院の選び方っていうのは、たとえば東大とか京大とか阪大とかがいいっていうような問題じゃないんです。総合科学研究科だからいいとかじゃなくて、どの先生につくか、教えてもらうかっていうことが非常に大事で、そういう意味では先生とつながりあうっていうのはすごく大事です。

それで面接を行い、「君は何がやりたいんですか」という研究計画を書いてもらうんですけど、そこで、その人のやりたいことがちゃんとしてればいいし、それからうちの研究科だと入学試験で「総合科学」に関する問題を出すんです。あなたの研究テーマと総合科学はどんな関わりがありますかとか、あなたのテーマは総合科学とか学際的な観点からどのように問題解決ができますかとか、そういうことは考えたことないですね、他学部の人は。

そういうことは、皆さんだったらたぶん1年生とか2年生とかのときに少しは考えるんじゃないかと思うんです（笑）。」

――試験の内容はどんなものですか。

吉田「試験は推薦入学と一般入学とがあるんですが、一般入試でいくと、専門の科目は研究科共通の問題と、志望する専門領域の問題、その2つがあります。それとあと外国語は英語など1つで、あともう1つ、口述試験といってインタビューであなたがやりたいテーマについて3人以上の先生から質問されたり、きつく言われたりします（笑）。共通問題っていうのが、知らな

☆RMプログラム

文理融合リサーチマネージャー（Research Manager）プログラム。現代の問題に対して、文理融合の視点から解決策を探っていくプログラム。総合科学研究科の大学院生なら誰でも参加できる。

い人から見ると何だこれ？っていう感じかもしれません。もう1つは案外知られてないんですけど、推薦入学というのがあって、推薦入学は自己推薦。で、4年生を対象に、この推薦入学が7月ぐらいにあります。

それで、推薦入学の方は、やる気のある人にはお勧めの試験でして、自己推薦書で計画を書いてもらう。それをめぐって口述試験を行うという試験なので、ちゃんと研究計画が書けていれば、筆記試験はありません（笑）。

この自己推薦の試験は、是非たくさん受けてほしいと思います。これは志望の先生の専門とちゃんとマッチングしていれば、きちんと具体的な研究計画になっていて、ディスカッションできますよね？

先ほども言いましたが、特にメッセージとしては、4年間勉強していく中で、このテーマについて自分はまだ引っかかっているぞ、これについて知りたい！そういう強い思いがあればどんどん道が開けてくるということですね、逆にネームバリューだけで大学院を選んでも何にもならないですね。」

引き続き院生の阿拉塔さん（D）、吉丸さん（M）にインタビューしました。

～院の志望動機～

――なぜ、院に進学されたのですか。

吉丸「僕が院に進学した理由は、将来教職に就こうと考えていて、そのために総合科学部だけの知識では……というのは失礼なんですけど、やっぱり教育学部の知識に太刀打ちできないな、と思ったんです。それで、音声習得という面で教育学部に勝てるような研究をしたいなと思い、大学院に入りました。そのために、音声習得の専門家の山田純先生のご指導のもとで音声習得、音声習得の中でも特に日本人と欧米人を比較することでその特徴を明らかにして教育の音声指導上の留意点というものを提案できたらと考えています。音声を欧米人と比較してどのような特徴があるのか、その特徴というものはポジティブなものなのか、或いはネガティブなものなのか、ネガティブであればそれをどのようにしたら改善できるのかというようなことを実際に現場に立った時に教えられるようにしたいと考えています。」

阿拉塔「大学院生になったのは随分前のことなんですけど（笑）。私は日本の大学を卒業した後に、国に帰って日本と何か関連のある科目を学校で教えようと思って、大学院に入りました。」

――先生というのはどこの先生ですか。

阿拉塔「そうですね、国に帰って出来れば大学のなんですけど、駄目なら高校でも専門学校の先生でもいいのでなりたいなと思っています。」

阿拉塔（アラタ）さん

～院の面白さ～

――大学院の授業はどのあたりが面白いと思いますか。

吉丸「大学院は自分の専門を追求した人が行き着くところというイメージがありますよね。でも、総科の大学院というのはいろんな分野の人が、例えば文系の授業に理系の人が参加するし、逆に、文系の人が理系の授業にも参加するという多角的な視野を得る上で有利というか、そのために役立つ授業ばかりなのでそういうところがすごくいいなと思っています。例えば『文系対象科学基礎実験』という授業があって、それは文系の人が理系の視野を一つの単一の視野ではなくて複数の視野を得るために開講している授業なんです。そういう授業があるところが総科の魅力じゃないかなって考えています。」

阿拉塔「私は今はあまり授業がありません。あるのはゼミだけで、1対1の先生とのやりとりだけです。

研究分野の発表でも、ゼミに関してはMはMで、DはDでやっていますので。Dで社会科学研究科の院生の方で、先生のところについている方がいるんですけれど、総科のDと社会科学のDでは別々にゼミをしていますので、総合科学研究科では私だけです。なので、ゼミのときは私1人になります。」

吉田「1対1の授業って僕も昔、院生のときにあったんだけど、自分が行かないと成立しない。それってすごいでしょ。遅刻していってもずっと先生が待ってるんだから。」

阿拉塔「行ったとしても、自分から何か言わないと先生は何も言いません。自分からこういう調査があって、こういうことをしましたって言うと、先生がそれに対してアドバイスをしたり、他にこういう研究があるのでこんな論文も読みなさいと言って下さるんです。何もなくて準備してません、って

言ったら、会話が進まないんです。」

――フィールドワークなどは行かれたことありますか？

阿拉塔「先生と一緒ではなく1人で2か月ほど行ってきました。自分の地元なんですけど。

学生独自プロジェクトというのは研究したい人にはとてもいい制度だと私は思っています。企画したプロジェクトに援助して下さって、そのお金で飛行機のチケットを買いました。」

吉田「調査、研究のためですね。学生独自プロジェクトというのがあって、「どこかに調査研究をしたり研修に行く。」あるいは「国際学会で発表します。」と言うとその飛行機代とか宿泊費とかの予算を出してもらえます。全員ではないですが、申請すると当たることがあります。頑張ってやる気のある人にはサポートするシステムを作っているんです。

吉丸さん

――学会などでの発表はしますか。

阿拉塔「1年に1、2回はします。私の場合はM1のときから必ずしなさいということで。今年の5月にも発表しました。」

吉丸「Mのほうでは、学内での中間発表免除という制度があり、8月に学会発表しました。今後上手くいったら来年も発表したい、と考えています。」

阿拉塔「1年生は大変ですよね。」

吉丸「はい、大変でした。」

阿拉塔「Mで1年生の学会発表は本当に大変だと思います。」

～文理融合の実際～

吉丸「あと、コア科目がほかの授業などと重なってしまって大変でした。」

吉田「コア科目はTAの人も参加している学生も頑張らないといけない。まるでプロジェクトのようなものだから。吉丸君たちは何かアンケート調査をやったんだよね。」

吉丸「はい。」

吉田「大学を出て、外国人にアンケートを取ったりしてたよね。でも、やっぱりそれって役に立つでしょ。」

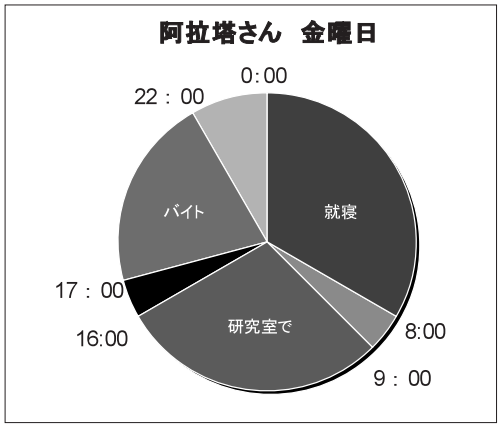
吉丸「プロジェクト研究の折り合いのつけかたが分かりましたね。コア科目っていうのは、分野が異なる文理の枠を超えて一つのことに取り組むので簡単にはまとまらないんです。だから、ここら辺でいいかな、と折り合いをつけざるを得ません。でも、それってやっぱり大切だと僕は思うんですよ。もちろん自分の言いたいことは捨てずに、相手の専門性とも協調するという学問における協調性というものを学びました。」

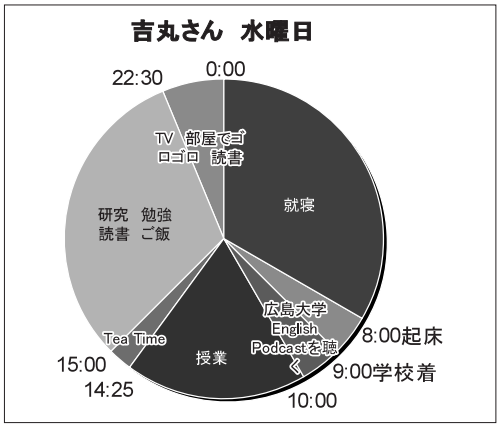
吉田「僕も総合情報論の担当をしていたんですけど、グループディスカッションをするんです。それで、最終的にはパワーポイントのスライドを作ってもらうんですけど、なかなかまとまらない。時にはディスカッションがだんだん険悪になることも（笑）。俺はこうだ、いや、絶対譲らんと言ってそれがまとまらなくてどうしようという時もありますね。」

――分野が異なる人が話しあうときはどのようになりますか。

吉丸「分野がかみ合わないので、みんながかみ合うような内容を模索して、それぞれがアプローチできるようなテーマを見つけていきます。例えば言語研究の人なら外国人の言語の関係はどうなのかというところからアプローチします。僕たちのグループは、外国人の方の薬の購入の仕方について調べたんですけど身体運動科学系の人から見た薬の作用の度合とかそういう方向からアプローチしたりして。」

吉田「外国人の人が薬をどう買っているか、薬事法改正がどうだとか。それに関するアンケートを日本語と英語でやって……。」





☆吉丸さんと阿拉塔さんに、大学院生の一日を円グラフで描いていただきました。

☆大学院生の部屋
大学院生には自分の部屋が割り振られます。上の写真は阿拉塔さんたちの部屋の様子です。

吉丸「それにフランス語、中国語、台湾語でも作りました。」
吉田「それらの言語で作ってアンケートしたけど、うまくいかなかったようだと聞きましたけど。」
吉丸「はい。ベトナム、ブラジルなどの人が多くてポルトガル語の必要性が……。」
吉田「外国人というのは多様だってことを知ったんですね（笑）。そういうことを実地で知ったのはいい経験ですよ。」

〜留学〜

――阿拉塔さんにお聞きします。なぜ日本を選ばれたんですか。

阿拉塔「偶然の出会いがあって、私が国にいるときは19歳で専門学校を卒業してから、アルバイトをしていました。あまり就職がなくて、その時にアルバイト先の飲食店で一人のおじいさんがいつも食べに来て下さいました。そのおじいさんは、忙しいときにご飯を食べ終わった後にきれいに片付けて下さったんです。私はすごく親切な人だなと思っていました。ある日、おじいさんは何人かの若者と一緒に来て訳の分からない言葉を話していました。私はその言葉をなんだかすごく勉強したいなと思って、後で店長にさっきのおじいさんのしゃべっている言葉はなんですかと聞くと、それは日本語ですよ、と言われて。それがきっかけで専門学校を卒業した後に日本語学校に行きました。日本語を勉強したいという思いで日本語学校に行ったら、私の学校と日本の大学に提携がありました。日本語能力試験一級に受かったら、日本の大学に行けます、という制度がありました。
それで、1級を取得して日本に来ました。なんだかすごく変なエピソードなんですけど。
だから、おじいさんとの出会いがなければ、日本語とは縁がなかったかもしれませんね。その人が今どこで、どうしているか分からないんですけど。」

――質問は以上です。ありがとうございました。

〜インタビューを終えて〜
大学院についての話はどれも全く知らないことばかりで、とても興味深いお話でした。特に、試験の話や進路については、実際はこうなんだということが分かって良かったです。その一方で、やっぱり研究はとても苦労して、やってるんだということも、分かりました。学部と同じく、院でも「総合科学」をどのように扱っていくかに、いろいろな工夫をこらしているんだと思いました。今回の取材で、大学院についてのイメージが膨らみました。

【担当】20生　世良　真一郎
21生　吉田　聡
久住　忠彦